横浜市　令和3年度 英語教育改善プラン推進事業

取組：「指導と評価の一体化」を図った授業改善

当該地域の特性等を踏まえた課題分析の視点

本市では、平成22年より全国に先駆けて小学校１年生から外国語活動を実施しており、ALTを活用した英語を使用する場を積極的に設けるなど小中９年間を見通した英語教育を実施している。一方で、新学習指導要領の実施や小学校における教科化により、視点を明確にした授業改善や小中連携の在り方について研究を進め、周知していく必要があるという課題が見られる。

Plan

■取組計画
- 小学校外国語科における教科書を活用した授業展開及び評価についての周知
- 中学校における発信力強化を踏まえた授業改善モデル（評価を含む）の構築及び周知
- 効果的かつ持続可能な研修システムの構築

■体制
- 研修協力校による研究
- 実践推進校事業の実施
- オンライン研修システムの活用

Do

■小学校外国語科における授業展開の支援
- 小学校における授業づくりや評価について、学校の実態に応じた内容で外国語指導主事助手と共に学校訪問研修（※１）を実施した。
- 小学校全学年を対象にした授業事例集を提示した。

■５ラウンドシステム実践推進校事業

令和３年度は公募に基づき、12校の実践推進校により事業を実施した。指導主事及び大学教員による指導助言（※２）や公開授業を実施すると同時に、５つのラウンドごとに授業を撮影し授業の進め方や生徒の変容等をeラーニングで発信した。

■オンライン研修システムの活用

研修管理システムを活用し、公開授業、研究協議会、集合研修等の様子を映像に収め、オンラインによる研修を実施した。

※１、※２　緊急事態宣言及びまん延防止等重点措置期間における学校訪問は中止。

Check

コロナ禍において学校への負担を避けるため、令和３年度は独自のアンケート調査は未実施だが、英語教育実施状況調査や学校訪問等における見取りから次のように検証する。

■小学校に関する取組検証
- 授業に占める言語活動の時間の割合が半分以上の学校が93%
- 十分なインプットを基とした授業づくりが浸透
- CAN-DOリストの作成及び活用へのより一層の理解と実施が必要

■中学校に関する取組検証
- 授業に占める言語活動の時間の割合が半分以上の学校が65%
- パフォーマンステストの実施率の向上及び内容に関する課題
- 学習評価に関する一層の理解と具体的な授業改善の必要性

■研修システムに関する取組
- 時間と場所を選ばず参加できることで、コロナ禍においても継続した研修の実施が可能
- 参加者のニーズに応えるため、双方向型研修の実施が必要

Action

■横浜ラウンドシステムを活用した授業改善モデルの構築及び推進
- 言語を活用する実際の場を意識した授業改善に向けた研究推進

■ALT及び小学校外国語専科教員等の人材活用
- ALTとのTTの推進及びリーダーとしての専科教員の拡充

■対面体験形式とオンライン形式の双方を活用したシステムの構築

成果の普及

■ 横浜市行政情報ネットワーク上における情報公開
- 外国語教育に関する刊行物（横浜市小中高等学校英語教育推進プログラム等）
- 小学校、中学校向けの授業案例、指導案、授業事例集、教材等

■ 横浜市教育研究会英語科部会会報による情報発信

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～横浜市立中川西中学校～

課題

・5ラウンドシステムをもとにした授業つくりにおけるコミュニケーション能力の向上と基礎学力の定着
・5ラウンドシステムにおける3観点による評価と指導の一体化

具体的な取組と工夫

・コミュニケーション活動を中心とした授業展開。AccuracyよりもFluencyを重視した指導内容。
・各学年ごとの１年後の育成したい姿の明確化。
・ペアトークを中心とした言語活動の充実。
・各観点の評価規準やパフォーマンステストなどの評価規準を生徒に開示。
・英語科通信による学習目標の明確化。
・文法、語彙の学習時間の定期的な確保。

成果

＜教員から見た生徒の変容＞

・自分の考えや意見を間違えを恐れずわかる範囲の英語で伝えようとする姿勢が多くみられた。
・教科書を5回繰り返すことで、本文のフレーズを自然と覚え、日常会話やフリーライティングで生かすことができるようになった。
・新しい言語材料や表現は、何度も聞いて実際に会話の中で使ってから、仕組みを学ぶことで、知っているだけでなく、理解して使える生徒が増えた。
・評価規準を明確にすることにより、それぞれの生徒の目標や課題が具体的になり、自分に合ったやり方で力を伸ばそうとする生徒の姿が見られた。

＜生徒自身が感じている生徒の変容＞

・自分の思いを英語で伝えられることに喜びや達成感を感じている。特に、最後のリテリング活動では、最初は何もわからなかった内容が自分で英語で説明できるようになり、自身の成長を肌で感じている。
・文法の時間を確保することで、もやもやしていたことが頭の中で整理され、次の活動への意欲につながった。

課題及び改善案

＜教員間での情報共有＞

・年間指導目標や各ラウンドの達成目標、パフォーマンステストの評価基準など、学年を越えて、共通理解を図るため週1回の英語科部会を有意義なものにする。

＜生徒が成長を実感できる指導＞

・周りの中学校や塾と指導法が異なるため、文法や語彙の学習の定着について不安を抱えている生徒、保護者がいる。学力の向上を実感できるような授業と評価を心掛けていく。

＜英語科通信の有効活用＞

・各ラウンドの学習内容、努力目標、評価項目・基準などを丁寧に発信し生徒が自ら取り組みやすい環境を作る。

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～横浜市立西金沢義務教育学校（後期課程）～

課題

新学習指導要領の領域の一つである「話すこと（やりとり）」において、授業内でより「即興性の高い」やりとりを指導する必要性と難しさがある。本校の特色である前期課程（小学部）との連携で、即興性を高めるスピーキングの指導を推進したい。

具体的な取組と工夫

■5ラウンドシステムの効果的活用

教科書のストーリーを、目的や負荷を変えながら、5回繰り返して学ぶ5ラウンドシステムの利点と指導方法を、英語科全体で理解し、活用することで、話すことに必要な語彙や表現を確実に身に付けられるようにした。

■小学部からスタートするペアでのフリートークの活用

中学部の英語科職員が、小学部の外国語活動を一部担当し、5ラウンドシステムの根幹である帯活動で日々行う「教師とのやりとり」や「生徒同士のペアトーク」を、「小学部6年生から中学部3年生まで」充実させることで、教科書以外のインプットを大量に与えながら、即興的に話す「場」を毎回の授業で設けた。

■リテリングの活用

5ラウンドシステムの最終タスクであるリテリングの取り組みを十分に生かし、パターン化された表現ではない即興性を鍛えた。

■ALTの効果的活用

ALTとのスピーキングテストを計画的に行い、生徒自身が即興性に自信をつける工夫をした。

成果

■小学部から中学部に移行する段階で、話すことに対する抵抗感が少ない。

■生徒のアンケートの記述より「即興性」の向上、話すことへの自信の向上が感じられるものが多くみられた。
例）「ALTとの会話が以前よりずっと楽しめる」「授業で普段から会話していて、リテリングに挑戦したときに、自分の英語の幅が広がっていて驚いた」

■話すことの即興性が向上したことで、書くことの内容も充実し、短時間で分量や情報量の多い英文を書く力が伸びた。
例）英検でのライティング問題の「内容点」「構成点」で多くの生徒が高得点。

課題及び改善案

■単語や文法を正確に書く力の向上が、生徒によって、ややばらつきが見られる。
■小～中にかけての繋がりの強化やモチベーションの維持。
＜改善案＞
・教科書本文の表現や文型に注目させる機会を増やす。
・会話活動の成果を出せる場面（ミニプロジェクト）を定期的に設定して、目標をもたせる。

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～横浜市立東希望が丘小学校～

課題

日々の授業における指導と評価の一体化　　小学校外国語活動、外国語科における指導の展開

具体的な取組と工夫

■評価に焦点を当てた指導案検討や授業づくりと研究授業の展開

→教職員自体に課題意識のある「評価」について研究
授業を直接見ることがあまりできなかった分、動画でまとめて協議を行うこととした。動画となったことで、本時だけでなく、単元の一連の流れと評価を確認することができた。

■段階的な研究会の展開

→見通しをもった研究会の展開（左の表参照）
ゴールを見据えて研究会を進めていくことで、評価として「妥当性・信頼性」という点において、観点をずらさず迫ることができた。

■講師の先生を招いての研修会

→東京学芸大学　教授　粕谷恭子先生を招いての講演会
「言語活動」に対するとらえや、評価に対するとらえといった、指導観などについて講演いただいた。

研究会	テーマ	研究内容
1回目	「授業と評価の視点」	・使う場面を大切にした授業の進め方 ・外国語活動・外国語科における評価場面について ・指導案の内容について
2回目	「指導と評価の一体化」	・指導と評価の一体化が図れている授業とは ・児童に身に付けさせたい力を踏まえたゴール ・具体的な目指す姿をイメージした単元の展開
3回目	「指導と評価の質の向上」	・評価の妥当性・信頼性の検討 ・発達の段階に応じた児童に身に付けさせたい力の確認 ・児童に身に付けさせたい力をもとにした評価評定の考え方について

成果

■教員の指導観や授業観

研修を通して指導事項についてより精密なとらえができるようになってきたことで、「何を身に付けるのか」「何ができるようになるか」明確に持つことができるようになってきた。授業の展開を自分たちで考えることができるようになったことで児童の実態に合った無理のない展開をしていくことできるようになった。

■英語に苦手意識をもつ児童が減った

児童の実態に合った展開から、聞いたら「分かる」という体験や、気軽に「使う」場面を普段の授業から取り入れることができるようになってきた。聞くから分かる、分かるから聞く好循環を授業の中で生み出すことができた。

課題及び改善案

■「指導」と「評価」のバランス

評価について考えていくと評価ありきとなってしまうことが生まれてしまった。何のために評価を行うのか、何を評価するのか、をその都度整理して進めていくことが必要。今後も、カリキュラムマネジメントを継続していくことで、本校の児童に合った指導のねらいや展開の工夫について考えていく必要がある。

令和３年度 英語教育改善プラン推進事業　～横浜市立横浜吉田中学校～

課題

・生徒間の学力差が大きく、また学習に苦手意識のある生徒も多い。

・外国籍及び外国につながる生徒が多いため、互いの思いや考えを共有する機会、助け合って学習する機会を多く設定することが必要。

具体的な取組と工夫

■3学年とも5ラウンドシステムを取り入れた授業

■Small TalkやShort Reading等、帯活動の充実

■クロームブック、ロイロノート・スクールの活用による個人練習の充実
ラウンド3（音読のラウンド）、ラウンド4（穴あき音読のラウンド）の際、全体練習・ペアでの練習の他に、個人練習の時間を取り、個人の目標やレベルに合わせて教科書本文の音声を聞きながら音読練習のできる時間をとった。

■十分なインプットを行った後に、よく使う表現や文法を整理する。

成果

○クロームブック、ロイロノート・スクールを使い、音読の時間が充実した。特に、一人では練習の難しい生徒がモデルの音声を聞くことで音読の上達につながった。また、スモールトークの発話を録音して提出させることで、一人ひとりの発話を教員が聞いて評価やフィードバックすることができた。

○英検の市費受験の際に、2級や準2級等上位級の受験者数が増えた。
また、2次試験の合格者の割合が高くなった。

	2級	準2級
H30	0/1	6/7
R1	0/2	11/19
R2	3/5	11/15
R3	5/12	12/23

【R3　2次試験】
2級：6名受験→ 5名合格（1名未受験）
準2級：17名受験→ 12名合格
3級：49名受験→ 47名合格（1名未受験）

（＊合格者数／受験者数）

課題及び改善案

■クロームブック、ロイロノート・スクールに収録した教科書本文の音声を使っての音読個人練習の際、生徒が自分の目標やレベルによって効果的な練習方法を選択し、さらに意味のある練習時間にすることができるように教師側の声掛けやサポートをしていくことが必要。

■十分なインプットを行った後に、必要に応じて、文構造の適宜整理を行うことで、よく使う表現や文法を使って表現できるように指導していきたい。